

スペシャルオリンピックス会員におけるボランティアのイメージについて

○ 廠 謙烈（東海大学大学院） 大堀 孝雄（東海大学） 新出 昌明（東海大学）
 キーワード： スペシャルオリンピックス、ボランティア、知的障害者スポーツ

1. 調査目的

日本における障害者スポーツは1964年の東京パラリンピック大会、さらには、1982年国連で採択された「障害者に関する世界行動計画」を契機として一般の人々に知られるようになった。1998年2月に開催されたパラリンピック長野大会は国民の注目を浴びた。

一方、知的障害者の自立と社会参加の促進を目指すスペシャルオリンピックスも国際的な規模で世界各国に広がっている。スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月に設立し、国際本部に加盟した。1997年現在11地区組織（都府県）が設立され、日常活動としてスポーツトレーニングプログラムなどを実施している。

日本では1995年1月の阪神大震災以降、社会全般にわたりボランティア活動の重要性に対する認識と関心が高まってきている。障害者スポーツ分野も含め多様な分野でボランティア活動をしている人は日本国民30人に1人に及んでいる。¹⁾

本研究は、長野オリンピックにおけるボランティア調査に使用された24項目のイメージ測定尺度法（1997.12調査、新出）を用い、スペシャルオリンピックスのボランティア会員を対象として、会員制ボランティアの参与形態及びファミリー・非ファミリー会員によるボランティアのイメージについて検討することを目的とする。

2. 調査方法

(1) 対象

全国（熊本、東京、大阪、佐賀、神奈川、宮城、大分、福岡、石川、京都、福島）11地区におけるスペシャルオリンピックスのボランティア会員（法人、団体を除く）の名簿から無作為抽出法で選んだ980名。

(2) 期間

1998年6月22日～1998年7月6日

(3) 方法

郵送による質問紙法（5段階評定法24項目）

(4) 回収数（回収率）

回収数980、宛名不明21（回収率39.2%）、有効回収率38.6%

(5) 集計処理

各項目毎に単純集計（「まったくそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」）を行うとともに参与形態別、アスリートのファミリー会員・非ファミリー会員別にクロス集計を行なった。さらに、各項目の「まったくそう思う」、「ややそう思う」に回答した数を加算して肯定度、「まったくそう思わない」、「あまりそう思わない」に回答した数を加算して否定度とし、それぞれの上位3つの項目を比較した。

3. 対象者の属性

表1は、アスリートのファミリー会員・非ファミリー会員別属性に関する集計の結果を示している。アスリートのファミリー会員（90人、23.8%）、アスリートの非ファミリー

会員（288人、76.2%）で非ファミリー会員が約8割である。

4. 結果

(1) 全体のボランティアのイメージ

表2は、質問24項目に対して単純集計を行い、その回答数と割合を各項目ごとに示したものである。

全体の集計の結果、肯定度の上位3項目を挙げると「自発的なものである（328、89.6%）」「視野が広がるものである（324、88.5%）」「根気強さが必要なものである（321、87.7%）」の順であった。否定度の上位3項目としては「偽善的なものである（261、71.3%）」「自己満足のために行うものである（194、53.0%）」「感謝されるものである（171、46.7%）」の順であった。

(2) 参与形態によるボランティアのイメージ

表3は、参与形態別の肯定度の上位3項目と否定度上位3項目の結果を示したものである。

①参与形態別に見ると肯定度項目で5つのグループに共通している項目は「自発的なものである」の項目が挙げられた。否定度項目で5つのグループに共通している項目は「偽善的なものである」「自己満足のために行うものである」の2項目が挙げられた。

②会費会員の肯定度の上位3項目は全体のイメージの上位3項目である「自発的なものである」「視野が広がるものである」「根気強さが必要なものである」と同じ項目であるが順位に違いが見られた。

③全体と会費会員を除く4つのグループの肯定度上位3項目で共通する項目以外の項目は、理事・役員では、「社会のためになるものである」「喜びを分かち合うものである」

「責任が必要なものである」3項目であるが、コーチ責任者は「責任が必要なものである」、コーチ補助は「喜びを分かち合うものである」、サポーターでは「感動が得られるものである」各1項目のみであった。

④全体と5つのグループの否定度上位3項目と比較すると、会費会員、コーチ補助、サ

表1. アスリートのファミリー会員・非ファミリー会員別属性(度数、%)

所属地区	ファミリー会員		非ファミリー会員	
	度数	%	度数	%
熊本	16	17.8	59	20.5
東京	11	12.2	28	9.7
大阪			11	3.8
佐賀	4	4.4	7	2.4
神奈川	14	15.6	35	12.2
宮城	36	40.0	68	23.6
大分	1	1.1	23	8.0
福岡		3.3	34	11.8
石川			10	3.5
京都			5	1.7
徳島	5	5.6	8	2.8
性別				
男性	27	30.0	105	36.5
女性	63	70.0	183	63.5
年齢				
10～19歳	7	7.8	18	6.3
20～29歳	2	2.2	43	14.9
30～39歳	12	13.3	28	9.7
40～49歳	40	44.4	54	18.8
50～59歳	29	32.2	89	30.9
60～69歳			46	16.0
70歳以上			10	3.5
職業				
自営業	9	10.0	35	12.2
自営業	1	1.1	22	7.6
会社、団体職員	23	25.6	100	34.7
パート、バイト	13	14.4	24	8.3
生徒	6	6.7	10	3.5
学生	2	2.2	26	9.0
無職	36	40.0	71	24.7
会員歴				
8年			2	0.7
7年			1	0.3
6年	5	5.6	16	5.6
5年	4	4.4	27	9.4
4年	20	22.2	54	18.8
3年	24	26.7	77	26.7
2年	30	33.3	94	32.6
1年	7	7.8	7	5.9
参与形態				
会費会員	22	25.0	116	40.8
理事・役員	6	6.8	24	8.5
コーチ責任者	1	1.1	22	7.7
コーチ補助	17	19.3	75	26.4
サポーター	42	47.7	7	16.5

ポーターは順位も割合もほぼ同じ傾向であった。全体と異なる項目を挙げたグループは理事・役員「(困っている人を) 助けるものである(50.0%、3位)」、コーチ責任者「(困っている人を) 助けるものである(47.8%、2位)」であった。

表2. ボランティアのイメージ(全体)

N=366

質問項目	回答(度数、%)		まったくそう思う		ややそう思う		どちらとも言えない		あまりそう思わない		まったくそう思わない	
1. 社会のためになるものである。	155	42.3	112	30.6	67	18.3	26	7.1	6	1.6		
2. 無報酬で行うものである。	125	34.2	92	25.1	124	33.9	18	4.9	7	1.9		
3. 費で支えるものである。	95	26.0	89	24.3	121	33.1	45	12.3	16	4.4		
4. 助けるものである。	58	15.8	91	24.9	93	25.1	83	22.7	41	11.2		
5. 自発的なものである。	238	65.0	90	24.6	32	8.7	3	0.8	3	0.8		
6. 感謝されるものである。	15	4.1	43	11.7	137	37.4	103	28.1	68	18.6		
7. 視野が広がるものである。	167	45.6	157	42.9	34	9.3	8	2.2	0	0.0		
8. 感動が得られるものである。	170	46.4	146	39.9	39	10.7	8	2.2	3	0.8		
9. 充実感が得られるものである。	137	37.4	157	42.9	58	15.8	14	3.8	0	0.0		
10. 達成感が得られるものである。	93	25.4	153	41.8	99	27.0	16	4.4	5	1.4		
11. 満足度が得られるものである。	93	25.4	148	40.4	102	27.9	20	5.5	3	0.8		
12. 喜びを分かち合うものである。	205	56.0	109	29.8	34	9.3	12	3.3	6	1.6		
13. 自己満足のために行うものである。	16	4.4	33	9.0	123	33.6	87	23.8	107	29.2		
14. 社会を変えていくものである。	73	19.9	117	32.0	124	33.9	35	9.6	17	4.6		
15. 偽善的なものである。	13	3.6	8	2.2	84	23.0	84	23.0	177	48.4		
16. 継続的なものである。	174	47.5	119	32.5	60	16.4	10	2.7	3	0.8		
17. 自分自身のために行うものである。	77	21.0	154	42.1	100	27.3	24	6.6	11	3.0		
18. 楽しむことができるものである。	93	25.4	146	39.9	98	26.8	21	5.7	8	2.2		
19. 体力が必要なものである。	117	32.0	156	42.6	62	16.9	24	6.6	7	1.9		
20. 責任が必要なものである。	167	45.6	149	40.7	39	10.7	10	2.7	1	0.3		
21. 根気強さが必要なものである。	171	46.7	150	41.0	35	9.6	8	2.2	2	0.6		
22. 人生の生きがいになるものである。	70	19.1	156	42.6	105	28.7	30	8.2	5	1.4		
23. 有意義な余暇の過ごし方になるものである。	57	15.6	130	35.5	129	35.2	33	9.0	17	4.6		
24. チャレンジ精神を活かせる場となるものである。	69	18.9	143	39.1	117	32.0	26	7.1	11	3.0		

表3. ボランティア会員の参与形態別ボランティアのイメージ、上位3項目

・会費会員 113名(30.7%)、理事・役員 30名(8.3%)、コーチ責任者 23名(6.4%)、コーチ補助 90名(24.9%)、サポーター 86名(23.8%)

参与形態	回答数	まったくそう思うーややそう思う(肯定度)		まったくそう思わないーあまりそう思わない(否定度)	
		度数	%	度数	%
会費会員	①自発的なものである	86	64.7	93	69.9
	②根気強さが必要なものである	71	53.4	69	51.9
	③視野が広がるものである	58	48.1	66	49.6
理事・役員	①根気強さが必要なものである	29	93.3	25	83.3
	②自発的なものである	27	90.0	19	63.3
	③社会のためになるものである	26	86.7	15	50.0
	③責任が必要なものである	26	86.7		
コーチ責任者	①根気強さが必要なものである	22	95.6	17	73.9
	②自発的なものである	21	91.3	11	47.8
	③責任が必要なものである	21	91.3	11	47.8
コーチ補助	①自発的なものである	84	93.3	61	67.8
	②喜びを分かち合うものである	84	93.3	46	51.1
	③視野が広がるものである	81	90.0	41	45.6
サポーター	①視野が広がるものである	80	93.0	62	72.1
	②自発的なものである	76	88.4	47	54.6
	③感動が得られるものである	76	88.4	39	45.3

(3) アスリートのファミリー会員・非ファミリー会員によるボランティアのイメージ

表4は、アスリートのファミリー会員・非ファミリー会員別の肯定度の上位3項目と否定度上位3項目の結果を示したものである。

アスリートのファミリー会員・非ファミリー会員別で共通して挙げられた項目は肯定度項目順で「自発的なものである」「根気強さが必要なものである」の2項目、否定度項目順には上位3項目は同じ項目であり、割合もほぼ同様の傾向を示した。

表 4. アスリートのファミリー・非ファミリー会員別のボランティアのイメージ、上位 3 項目

*アスリートのファミリー会員 89 名(24.3%)、アスリートの非ファミリー会員 277 名(75.7%)

回答数 参与形態	まったくそう思う+ややそう思う (肯定度)			まったくそう思わない+あまりそう思わない (否定度)		
		度数	%		度数	%
アスリート のファミ リー 会員	①視野が広がるものである	83	93.3	①偽善的なものである	60	67.4
	②根気強さが必要なものである	82	92.1	②自己満足のために行うものである	43	48.3
	③自発的なものである	81	91.0	③感謝されるものである	31	34.8
非アスリート のファミ リー会員	①自発的なものである	257	92.8	①偽善的なものである	201	72.6
	②責任が必要なものである	242	87.4	②自己満足のために行うものである	151	54.5
	③感動が得られるものである	239	86.3	③感謝されるものである	140	50.5
	④根気強さが必要なものである	239	86.3			

4. 考 察

(1) 全体のイメージ

「まったくそう思う」と「ややそう思う」を合わせた肯定度の上位3項目は（自発的なものである、視野が広がるものである、根気強さが必要なものである）であった。しかし「まったくそう思う」の上位3項目を見ると1位は「自発的なものである（65.0%）」、2位は「喜びを分かち合うものである（56.0%）」、3位は「継続的なものである（47.5%）」であることを考えると、参与形態は異なるがスペシャルオリンピックスのボランティア会員全体は主体性、継続性、学習性、連帯・共有性のイメージを有していることが伺われた。一方、否定度の上位3項目は「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」を合わせた結果と「まったくそう思わない」の結果は同一であり、偽善性、自己本位性、打算性を否定したイメージを有していると考えられた。

(2) 参与形態によるイメージ

肯定度上位3項目に限定した結果をみると、会費会員と他の4つのグループとは項目の内容が異なった。このことは、会費会員の大部分は資金協賛のみによる参与であり、スポーツトレーニングプログラムや行事等には参加しないことが要因と推察される。

理事・役員、コーチ責任者、コーチ補助、サポーターの肯定度及び否定度の項目の内容に違いがあることは、参与の度合いが異なることから当然の結果と推察された。

(3) アスリートのファミリー・非ファミリーによるイメージ

肯定度の項目でファミリーと非ファミリーが異なる項目はファミリーの「視野が広がるものである」（1位）、非ファミリーは「責任が必要なものである」（2位）の1項目であり、他の4項目は共通している。これは、ファミリーはスペシャルオリンピックスの会員ボランティアであると同時に非ファミリー会員のボランティアによるサービスを受ける立場にあることが反映した結果であると考えられた。

5. まとめ

今回のイメージの調査内容24項目は、ボランティアまたはボランティアの明確な概念のもとに作成したものではない。新出らと異なる対象を調査し、スポーツボランティアまたはボランティアのイメージを探索することであった。今後は、ボランティア・スポーツボランティアのイメージの構造化が研究の課題である。

1) イエローリポート編：ボランティアを始めよう. p 17 実務教育出版. 1995